



TITLE:

近世真宗史の諸問題(Abstract_要
旨)

AUTHOR(S):

梅原, 隆章

CITATION:

梅原, 隆章. 近世真宗史の諸問題. 京都大学, 1964, 文学博士

ISSUE DATE:

1964-06-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211274>

RIGHT:

【 5 】

氏 名	梅 原 隆 章
	うめ はら りゅう しょう
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 6 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 39 年 6 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	近 世 真 宗 史 の 諸 問 題
論文調査委員	(主 査) 教 授 赤 松 俊 秀 教 授 小 葉 田 淳 教 授 長 尾 雅 人 教 授 武 内 義 範

論 文 内 容 の 要 旨

主論文「近世真宗史の諸問題」は六章と附録から成っている。

第一章は「東西本願寺の分裂」と題する。大坂退出にあたって門跡父子の光佐・光寿が別行動を取ったことについては、古来種々論じられているが、著者は故辻善之助博士の見解に従って父子密約説を取り、その見地から、大坂退出のいきさつ、光寿の弟光昭が本願寺門主を継職した事情、光寿の東本願寺分立の経過を論ずる。著者の見解が辻博士の説と異なるのは、光佐の護状偽作説を取らないことである。この護状の真偽についても多く論じられ、なお一定していないが、著者が偽作説を排するのは、父子密約を事実と認めることからくる当然の結論であり、本願寺教団の安全を計るため、光佐と光寿は協議し万一の事態が生じた時は、光昭を本願寺留主職とするむねの護状を作製した、とするのである。著者のこの立場は、参考論文「真宗史の諸問題」において明らかにした、本願寺の宗昭・光玄が事前に打ち合わせて表面不和をよそおって教団の安全を図った、と認めることに相通ずるものである。

第二章は「真宗に対する制度的規正」と題し、法制を中心に、江戸幕府の対真宗政策、真宗の本末制度、西本願寺の宗制寺法、同教団内部組織を論ずる。著者が指摘したことで注目されるのは、この時代に毛坊主の道場が寺院に昇格したことが多かったことである。毛坊主とは俗人が領主の許可を得て道場を建立維持するものをいう。このような道場が江戸時代に逐次寺院に昇格したことによって真宗の教勢はこの時代においても発展を遂げた。

第三章の「宗義論争と宗学の展開」において著者は、西本願寺の学林を中心として、前後三回にわたって継起した宗義論争について、その経過を述べ、あわせてその意義を評価する。これらの「三大法難」については、過去に発表された研究があり、著者の論述もそれに負うているところが多いが関係史料をよく検討して新しい事実をも明らかにしている。宗論の意義評価について、既往の研究は宗派の教権を傷けないという拘束が課せられていて、その所論には、公正妥当でないものも認められる。それに対して著者の所論は、宗論の激化した原因を突き、本願寺当局者の適切を欠いた処置が宗学の固定沈滞をもたらしたこ

とを明らかにする。

第四章「譲状の起源と伝承」は西本願寺に長く維持された本願寺住持職譲状作製の慣習の起源とその保持について論ずる。西本願寺では、三代宗昭の時から明治4年譲職の光沢まで、その間一、二の例外はあるが、譲職する住持は譲状を作製する慣習を保持したが、著者はその起源を親鸞遺言状・尼覚信譲状に求め、譲状が作製されなかった例外の場合について所見を明らかにする。

第五章「天保期における財政改革」は、幕藩体制の財政的危機が顕著になった天保年間に西本願寺において、負債整理のために起用された町人石田小左衛門が断行し成功した財政改革を主題とする。改革の中心は冗費節約と志納金増加におかれたが、注目されるのは学林を利用して学僧により教義の宣布を盛んにし、門徒の講組織を強化して志納増加を企てた事である。当時の西本願寺の負債は六十万両に上ったが、それを三年間にはほぼ返済しえたことは当時としては特記すべきことであった。また負債整理直後に建立された惣会所がその後布教の中心となったことも注目される。

第六章「興正寺と西本願寺の確執」は興正寺が西本願寺から独立する経過を明らかにする。興正寺は蓮教が本願寺兼寿に随従して以来、本願寺の連枝格として派内でも特別に遇されたのであるが、江戸時代を通じて両寺の交際は円満を欠き、明治9年に独立した。その過程を詳細に明らかにした研究は、従来なかったが、著者は有力な史料を基にして、両者の背離した原因が末寺に対する支配権、興正寺住持の僧官叙任などをめぐる紛争にあったことを明確にしている。

附録「慈信房義絶状について」は親鸞がその子善鸞を義絶した時の書状が偽作と認められることを論ずる。参考論文「親鸞伝の諸問題」は親鸞の伝記における問題点を「真宗史の諸問題」は、宗昭・光玄を中心として親鸞以後、兼寿以前の本願寺教団史の問題点を明らかにしたものである。

論文審査の結果の要旨

真宗史の研究は宗祖親鸞の伝記研究に始まったが、半世紀にわたる研究成果の累積によって、親鸞の行実もかなり明確になり、従来、不明であった、親鸞以後、兼寿以前の時代の教団の推移も次第に究明されつつある。それに対してなお研究が進まないのは、近世真宗史の分野である。そのおもな原因は、教団が拡大したことによって関係史料が多く存在し、それを收集整理する基礎研究がなお不十分であること、近世を通じて激化する一方であった宗内各派の対立抗争が現在にも影響して、近世真宗史の研究を困難にしていることなどにある、と考えられる。著者は参考論文に提出した二部の著書等により親鸞伝・初期真宗史研究の発展に少なからぬ貢献をなしたが、なお困難の事情にある近世真宗史の究明にも従事し、重要な諸問題について多くの史料をあげ、おおむね公正妥当な見解を明らかにしている。今後の近世真宗史研究がそれによって導かれ多くの利益を受けることは確実である。ただその所論のなかには、やや挙証不足の感じがするところもないではない。著者が排する光佐譲状偽作説も写真その他により光佐の他の書状等と比較検討した結果が付加されているならば、その説はもっと説得力を増すであろう。また宗論の批判においても観点を真宗教義のみにおかないで広く仏教全体の教学に対して視野を広めるならば、もっと徹底した評価をなしたのではないか、と思われる。しかしこの論文によって近世真宗史研究の水準が著しく高められたことは確実である。よって文学博士の学位論文として価値あるものと認める。